

※これは愛善苑にとつて最も大切な四十七巻の総説です。それをズタズタにする神経はふつうでは理解できません。

王仁言靈 (32)

このタイトルは原文にはない

であることは、神典古事記、日本書紀等によつて明白なる事実であります。

出口王仁三郎

主の神は、宇宙一切の事物を濟度すべく、天地間を昇降遊ばして、その御魂を分け、あるひは釈迦と現はれ、あるひは基督となり、マホメットと化り、そのた種々雑多に神身を変じ給ひて、天地神人の救済に尽させたまふ仁慈無限の大神であります。しかして前に述べた通り、宇宙一切の大権は、嚴の御魂の大神すなはち太元神に属し、

祖神大六合常立大神に

救世主神、神素盞鳴大神

無限

持し

高天原には、宇宙の造物主なる大國常立大神が、天地万有一切の總統權を**持つて**神臨したまうのであります。そして、**またの**御

名を、天之御中主大神となえ奉り、**絶対の神格をもつて**靈力体の大原靈と現れたまうのであります。この大神の御神徳の、完全に發揮されたのを天照皇大神と称え奉るのであります。

そして靈の元祖たる高皇產靈大神は、神伊邪岐大神またの名は、日の大神となえ奉り、**体の元祖、神皇產靈大神は神伊邪那美大神またの名は月の大神となえ奉る。**

原文になし

この**靈系**である嚴の御魂は、ふたたび天照大神と顯現したまいて、天界の主宰神とならせたまいました。ちなみに天照皇大御神

所主の

様と天照大神様は、その位置において、**神格において、すべての御神業において、多くの差のあることを考えねばなりません。**また瑞の御魂は神素盞鳴大神と頭われたまい、大海原の國を統御あ

大変な差等の

のは、此物語にてしばしば述べられてある通りであります。また高皇產靈大神は靈系にして、嚴の御靈國常立大神と現はれ給ひ、体系の祖神なる神皇產靈大神は、瑞の御魂豊雲野大神、またの名は、豊國主大神と現はれ給うたのであります。

そばず、神代からの御神誓であります。

神界にては、一切をあげて一神の御管掌に歸したまい、宇宙の

祖神に**絶対的**の神權を御集めになつたのであります。

原文になし

ゆえに**祖神**、大六合常立大神は、**独一真神**にして宇宙一切を主管したまい、嚴の御魂の大神と顯現されました。

さて嚴の御魂に属する一切の物は、**すべて**瑞の御魂に属せしめ

給う**神約**でありますから、瑞の御魂は、すなわち嚴の御魂の**同体**

神といふことになりました。

悉皆

ゆえに嚴の御魂を太元神と称え奉り、瑞の御魂を救世神と称え、

または救ひの神

また主の神と単称するのであります。したがつて『靈界物語』**に**主の神とあるのは、神素盞鳴大神様のことです。

ゆゑにこの物語において、

この太元神に属せる一切は、瑞の御魂**すべて**にふくまれていまして、神を他のご神号を持たれる神々と三分して考えることはできません。ゆえに神素盞鳴大神は、救世神ともいい、**仁愛大神**

19

とも申しあげるのであります。

ぬ

に悉皆属されたる以上は、神を

撞の大神とも申し上げるのであります。

つまり、心に三を念じて、口に一をいふことはならないのであります。

王仁言靈 (33)

出口王仁三郎

初発

仰望しても

様々あつて、

天帝の創造に善悪美醜なし

「天帝一物を創造す。ことごとく力徳による。ゆえに善悪相混じ
美醜たがい相交わる」

これ「道の大原」のはじめに示されたる聖句である。つらつら
考うるに、蒼空を仰ぎ海原をみても、山川虫魚をみても、ことごとく
善悪美醜の区別がある。

原文になし

しかし「この世界は至善至美の神さまがお造りになつた以上は、
悪ということは微塵もなく、至善至美の物ばかりのはず」という

かつ

はたして

人があり「天帝は全知全能にして、万物をつくり、そして真善美
を好むものならば、なにゆえ全知全能の神徳によって、美なるも

その

の善なるもののみを拵え醜悪なもの拵えぬはずである。しか
ありませんが、決してさうはゆきませぬ。

へて、

智

を

ある人が、喜楽に向かつて詰問して曰く、

神の意志はたして真善美を愛するならば、元より善ばかり
を拵へておけば、別に悪を造つておいて悪を改めしめむと
て、宣伝に努力する必要はないか。要するに、

は自分から

しかしながら

るに現実的には、天帝みずから醜悪なるものを造り、その醜悪を
嫌うというのは自家撞着もはなはだしい矛盾である。われらは、
ここに至つて全知全能の神を疑わざるを得ず。」

と言つた

「人が沢山あつた。だが何人といえども、今日までのもろもろ

貧弱なる

の宗教、倫理、道德説が、方的な頭脳にしみこんでいる人達か

至極の

の考へ

原文になし

従来は「人は天地の花、万物の霊長」と言われているが、大本

では「神は万物普遍の霊にして、人は天地経綸の司宰者なり」

称へられて

と断定を下しているのである。これも出口教祖の二十七年間の、
筆先の大精神を通観して得たところの断案である。

一歩進んで、

かくのごとき尊き天地経綸の司宰者たる人間にも、また善悪美

区別

醜、大小強弱の別があつて、なかには天地経綸の司宰者どころか、

21

※この間の原文が大幅に削除されたため、前後の文脈が切断されている。仮
に「集約」するとしても、少なくともこの削除された部分の最後「喜楽は幼
時より我が国体の淵源を極めむとし、かつ明治三十一年以後今日にいたるま
で、ほとんど二十五年間、艱難辛苦を積み、神界の真相の一端を極めた結果、
宇宙真理の一部を『靈界物語』として発表することとなつたのである。道の
大原の聖句にも、天地間の万物に善悪美醜の混交せるは、全く力徳の塩梅に
よるものと断定を下してあるのは、実に万古不易の真理である。さてこの力
徳といふことは、一朝一夕に説き明すわけにはゆかぬ。約言すれば、動、静、
解、凝、引、弛、合、分の八力の活動の如何によつて、善悪美醜、大小強弱
が分かれるのである」との一文が必要である。

『神の国』誌
2006年7月号掲載

かへつて天地経緯の妨害をなす
かくのごとき
現はれて
如何にもよるのは

妨害をする人間が沢山にできている。こうした人間がでてくるの

をもって、人たるものの天職だと考えている。

天賦 は、ようするに一つは教育の内容、仕方によることは無論だが、

（『靈界物語』第三十八卷 第一章「道すがら」より集約）

過不及 それだけが原因ではなく、基本的な大原因は、天性の力徳の過不

※この後の原文が大幅に削除されている。少なくとも（後略）と明記するのが、テキストを扱う上での常識であろう。

概して 足によるところの結果で、お筆先のいわゆる身魂の因縁将来によ

真神を信じ楽天主義に生きよ

真の原因は決してさうではない。肝賢の

過不及 人間の肉体の善悪強弱は、すべて力徳の過不足により生ずると

孔子という聖人あり。朝に道を聞いて、夕べに死すとも可なり。

様 ころの結果である。人のこころの善悪智慧は、元より教育によつ

と教う。されど、道をきくのみではなく、道をきいて後に、道の種子を

て、その一部分は左右せらるるものである。

まき、その種子が生え枝繁りて、花咲き実を結びなば、死すとも

天賦的に しかし人は神についての尊きもので、世界を善にすすめ、美に

可なり。

開くべき天職をもっているものである。

夕べに死すとも、道をきかざる者より、はるかに優れり。しか

駆追し

進め、産業を拓き、かつ真の宗教を宣伝し、道義心の発達をたす

し吾は教えを聞いて、その教えの実りを得て、散りなんことを望

けて世界の醜悪を追放し、真善美の天地に進めてゆかねばなら

むなり。

ない。ぬのである。かまはぬ いいのだといつて、

死に臨みて、道をきけども、歩む時間のなきを悔ゆるなり。日

他人はどうでもかまわない、自分のみ清く正しければと、聖人

頃の生業のうちに、つねに歩み習っておかねば、道をきけども、

きどりでいては、人間としての天職を全くしたとはいえない。王

なんの印もなし。

喜楽

仁はつねに、政教慣造の進歩発達を祈願し、かつ完成せしむる

盗人捕らえてナワをなうごとく、その時の間にあわざるべし。

人間は小なる神として、また神の生宮としてこの世に生まれ出

済ましてあるやうなことは、

でたる以上は、終生神の御旨を奉戴し、天地の御用を助け奉ら

ものといふことはできないのである。

ねば、人と生まれ出でたる本分が尽くせないのである。人間は

裸体で生まれてきたのであるから、また裸体で死ねばよいとい

ふやうな棄鉢根性では、人生天賦の職責が遂げられぬのみなら

ず、せつかく神界より選まれて神の生宮として世に生まれさし

ていた、大神の御聖旨に背く罪人となるのである。

※タイトルを大胆に変更

火の洗礼と水の洗礼

王仁言靈 (36)

いわゆる三宝に帰依し奉る心である。火の洗礼と、水の洗礼とは、それほどの差異があるのである。某地の大火災を目して、火の洗礼だと人はいうけれど、それは違う、水の洗礼である、いかんとなれば、それは体的のものであるから。

瑞と巖とのはたらき

火は霊であり、水は体である。

瑞霊の教は永遠の生命のため、かくべからざるの教である。

巖霊の教は人生に欠くべからざるの教である。

瑞霊の教は道義的であり、体的であり、現在のである。

瑞霊の教は道義を超越して、愛のために愛し、真のために真をなす絶対境である。

教であって、

火をもって、パプテスマを行うということは、人間を靈的に救済するということである。これ大乘の教であって、今までの誤れるすべてのものを焼き尽くし、真の教を布かれることである。水をもってパプテスマを行うということは、人間を体的に救済することである。

である。

出口王仁三郎

つけ、わがまま勝手な自己保存をしたということになる。

祈りは天帝にのみ

祈りは天帝にのみすべきものである。他の神様には礼拝するのである。私はそのつもりで沢山の神様に礼拝する。それは人々に挨拶すると同様の意味である。において

それはあたかも

誠の神様は、ただ一柱しかおわしませぬ。他はみなエンゼルである。

※他に改竄箇所がなければたんなる誤植といえようが、実際には、「と」と「の」のニュアンスの違いがわからぬ人間による無神経な改竄であると推認される。

三猿主義

三猿主義は徳川氏の消極政策

処しては、

見ざる、聞かざる、言わざると云うモットーがある。面倒くさい浮世にあつては、この三猿主義にかくれるのが、一面上分別の

一番

ようにもおもわれるが、これは徳川氏が人民を制御した消極政策である。この政策によって三百年の平和の維持に努めたが、神様のお道である積極主義、進展主義からすると、人民を武力で抑え

を維持しようと努めた陋劣な手段である。

はこれに反して、

河水

和歌の調べと

る

すらすらと

歌というものは、河の流れるようにとどこおりなく、調べが流れねばならぬ。下の句から上の句にかえってゆくようなものは、歌としておもしろくない。

歌は歌うものであるから、そのことをよく考えて、どこまでも

歌

※この部分だけは明らかにPC（ポリテイカル・コレクトネス）的観点から問題があり、原文の削除は許容される。しかし、編集者の勝手な書き換えは免責されない。

人民を盲人や、唾者や聾者にしておいて、わがまま勝手なことをしようとは、ずいぶん虫のよい話ではないか。

すらすらと調べがよいように詠まねばならぬ。詩は少々変つてもよい。

よく訳をおっしゃって、理解してお貰いになりましたら二代様もけつしてそんなことはされないのでは御座いますまいかと私（加藤明子）が申し上げました。

御 み手代と国替

すると 国替をしたら、み手代や楽焼のお茶碗、お盃などは、その人の所有として埋めてやれと、聖師様がおっしゃたという怪宣伝があるそうだが、そんなことは決してない。それでは、せっかく私が

霊をこめて造ったものが、みな土中に埋もれてしまうことになる。そんなつまらぬ事をしてはならぬ、後にとつておいて、お祭りのたびに供えるようにしたらよいのである。

※タイトルを大胆に変更

御 極秘の神苑拡張の悩み

綾部の神苑を建設するについて妨害ばかり受けたものである。私は教祖様のお頼みで池を掘ろうとおもい、地所を買っておいた。

そうすると、そして地所を清めるために二、三年草を生やして放っておいた。すると二代が怒って「もったいない、こんな荒地にしておいては神様の御気勘にかなわない」といって大根やネギを植え、人糞肥料をかけて汚してしまう。私が抜いておくとまた植える。こんなことばかりで、ちつとも思うようにゆかない。

して ことばかりで、ちつとも思うようにゆかない。 かつた

※これは原題「敵と瑞」からのごく一部の抜粋である。原文は、瑞霊の神業を理解しない開祖派の役員や二代からの妨害に苦勞しつつも、じつは開祖にかかる神は瑞霊の神業を理解していたという回想である。「神苑拡張」はその一環として回想されているにすぎない。それを、ここだけ抜粋し、しかも「極秘の神苑拡張」という思わせぶりな表題をつけて掲載することの意味はなんである。

※カキ括弧は原文になし

悪魔のさやる世の中、おしゃべり多い世の中だ、その地が神苑になるどわかれば、たちまち地所の価格も騰貴しよう。まだ次々と買収して神苑を拡張せねばならないのに、不如意の大本の経済としては、この点を十分考慮せねばならぬ。それだから妻にも子にも誰にも云えないのである。

聖師様は、それを云えば神様の御経緯に邪魔が入るではないか、

、というのか……

のだ

行かなければならないのだから、

温室天国

三月

※原文になし。前段で黒子であるべき加藤明子を出したため、こういう不細工なことになったのである。

外は零下幾度に下らんとしている時でも、温室内は春陽四月のごとき温かきで、百花咲きみちて、天国が偲ばれる。ではないか

神様は、世界を温室にしようとして居られるのである。温かく、清らけく、そして美しく。

霊と精霊のちがい

※原文になし

霊と精霊とを混同して考えている人があるが、それはたいへんな間違いである。

※この部分、原文どおりで十分に意味が通じる。にもかかわらず、なぜこのような不細工な加工をするのか。聞き手としての加藤明子はあくまで黒子でなければならぬ。そのため、原文では、話者（聖師）が反語形で黒子の質問内容を補足するという表記を選択しているのである。

おる

乃至は

ないで

ぐじやぐじやに

靈は万物に普遍して**いる**ので、この火鉢や鉄ビン**また**草花にでもある。もし靈が脱けてしまえば、物はその形を保つことができず**に**崩壊してしまう。非常に長い年数を経た土器などが、どうもしないのに崩れてしまうのは、靈が抜けてしまったからで、**鉱物**、植物みな靈のあるあいだは、用をなすものである。

精霊というのは動物の靈をさすのであって、すなわち生魂いくみたまである。
※こういう題は原文にはない。「宿命と運命」「運は人が作る」という別々の聖言を改竄し、つなげたものである。「抄出」というの名のもとに、こういう想定外の行為が平然と行われていることに慄然とせざるをえない。

運命を変える
各自

宿命とは人間が先天的にもって生れた境遇であって、後天的に**は**どうすることも出来ない境遇をいうのである。

原文になし

たとえば農家に生れた、商家に生れた、山谷家の息子と生れたなどは、動かすことのできない宿命である。

原文になし

なにか仕事を交えようかと「運命」を切りひらくことはできないが、**他**に天性の美人**だつて**境遇がわるく、くすぶつておれば、化粧装飾を十分にすることのできる醜婦より見劣りがするものである。

※原文になし

運という字は、こちらから運んで運命を展開してゆくのであって、自分から思わくの立つようにしてゆくのである。そういう人を神様はお助けなさるので、棚から落ちてくる牡丹餅ぼたんもちを待っている。

※以下は「運は人が作る」という題の別の聖言を改竄したものである。あまりに煩雑になり、かつあまりにも馬鹿馬鹿しいので照合はしない。

るような人は、いつまで待っても運が開けることはない。幸運は**は**こばねば得難いものである。

家庭的な愛情

恋愛と家庭

相愛する

お互いに愛するもの同志が結婚してつくった家庭は、家庭としてはあまり面白くないものである。なぜならば『靈界物語』に示されてあるごとく、夫婦は家庭の重要品であつて、家庭本位でやつてゆかねばならぬ。

しかるに相愛する同志は、ややもすれば家庭を忘れて夫婦本位となる傾きがある。また相愛する同志は、意思想念に共通点が多いので、何事にもすぐ共鳴しやすい。

したがつて夫が主張することには、一も二もなく妻が賛成してしまう。それがまた家庭からみて、為にならぬことがある。

やはり夫婦は家庭本位でなければならぬから、時には夫のいう事でも、家庭のためにならぬことには、反対せねばならぬ。夫婦の性格は反対の方が、かえつて家庭からいふとよい夫婦といえよう。

である

(以上、『水鏡』より抄出)

運命は努力次第で無限に開拓して行けるものである。たとえば貴族に生まれた、平民に生まれた、美人に生まれた、醜婦に生まれた、農家に生まれた、商家に生まれたとこういうのは宿命である。後からそれを動かすことは絶対に出来ない、しかし平民に生まれたというて、生涯平民で終わらねばならぬといふ理由はない。各自の努力次第で貴族になれんこともなければ、貴族といえども放蕩らん情を事とすれば、礼遇停止で平民に降下せんともかぎらぬ。

これも一生涯農業をせねばならぬといふことはない。

王仁言靈 (37)

出口王仁三郎

この部分は原文になし

追善供養

現界に居る人の意志想念は、天国にも通ずるものである。子が信仰にはげめば、それが幽界の親に通じて、幽界にある親の意志想念もだんだん向上してゆく。

また、例えば本部で靈祭を行うことも同様で、御魂の向上については、追善供養が大切な理由である。

善と悪とは

世のなかに絶対善もなければ、絶対悪もないことは、『靈界物語』によって示される通りであるが、強いて絶対善を求むるならば、愛こそはそれであり、憎こそ絶対悪である。

これ追善供養が大切な理由である。供物は誰の手でも同じであって、お寺に納めてお坊さんに供養してもらおうが、神主に頼んでお供えしてもらおうが、それはみな天国に届くのである、なぜならば、こちらの意志想念は死者に手向けるつもりであるから。ゆえに追善供養は、あたかも天国へ為替を組むようなものである。

※この部分は原文が大幅に削除され、聖師様がまったく仰っていない言葉が編者によって勝手に書き加えられています。もともと悪質な改竄捏造のひとつです。

のである

物忘れと無我の境地

物をきいてすぐ忘れてしまうと心配する人があるが、それはかえって結構なことである。善いことはみな血管に吸収されて、靈の糧となるから、これが真智となつて必要な場合に現れてくる。

覚えているようなことはカスであつて、それは神経系統のなかに吸収されるのである。人間が浄化すれば浄化するほど、聞いたよいことは、ずんずん血液のなかに吸収されて、意識のなかに沈んでゆく。かくて血液中に吸収されたものは、必要の場合には現れてくるが、平素はでてこない。これが無我の状態である。

神社参拝の心得

正式に神社参拝するときは、必ず御玉串をお供えすべきである。

神饌料を捧呈すべきものであるが、

ほんの

のこと

「ちょっとしたお宮へ、通りすがりに参拝するにしても、お賽銭さいせんは五銭以上（現在の価格で約三十円）お供えすべきものである。プラットホームの入場料でも五銭とるではないか。御神苑内に入れていただくのだから、それ以上、差し上げるのは当然である。またお祭りを当てこんで、境内で店をひらいている商品は、値切らないで、たとえ少しのものでも買うのがよい。神様がお喜びになる。」

※表題から改竄されています

半僧坊様

天狗様をどうしたら

原文になし

ある人が聖師様にお伺いされました。

のでございまして

しておられました。

買うてやるがよい。

そうすると

いたします

お

おるので
ございますが

それを

存じ

ご相談いたしますと

「私の実家に古くから祭っております半僧坊さんの神像があります。大本様に入信する前に、私が深く帰依していたもので、夫の病氣も子供の大病もおかげを頂いた事が度々なので、いまは別に神社を建て、給仕人をつけているのですが、ある事情で私の家に引きとらねばならなくなりました。それで小さいお社でも建ててお祭りしようと思ひ、ある人に相談しますと「半僧坊なんか天狗だ、大本の神様を奉齋している以上、そんなものを祭る必要はない、ご相談いたしますと」

古来、代々の天子様が地方を御巡視遊ばさるることを行幸と申しているが、それはお出ましになる地方がたくさんの頂きものをして喜び勇み、心から幸福を感じるからのことである。山川も寄りて仕うる聖天子が行幸遊ばさるときは、魚も獣も皆その徳を慕うて寄つて来るため、海には漁猟が多くて漁

※この部分は原文典が大幅に削除されている。そのため、なぜ境内の露天で買う物をするのが「神様のお喜び」にならざるのかという理由がまったく不明確になり、聖師様の権威を貶める結果となっている。

お

「社を建てるなり、家のなかにもお祭りしておきなさい。大本に

あるいは

来られるまで、その天狗さんが守ってくれたので、その恩を放棄し、急に粗末にして、捨てたり焼いたりしない方がよろしい。そうして、真の信仰を培うようにして下さい。」

（以上、『水鏡』より抄出）

焼けば子供が死ぬ、夫がまたもや病氣するというような悲惨事が起こつて来る。

争いは自己愛から

※この部分もまったく改竄され、「真の信仰を培うようにして下さい」という言葉が編者によって書き加えられている。

一、戦いの起こりは、その本は自愛の欲からであるが、双方ともに善ならず、世界を一目に見たもう神は、少しにても正しき方へ勝利を得させたもうこと必定である。

一、世界中、兵あるがために、欲もおこり戦いもあるのである。世界の戦は運不運をきらいたもう天帝の大御心になわぬことである。世界おだやかのためには戦も止むをえぬ次第なれど、戦ぐらい世界にむごきものはない。

一、神のおさるべきを知り、誠の心をもつて善をおこなう。一人

師が喜び、山には獲物が多くなつて猟師が喜ぶのである。その如く神様も、その境内に集まる人たちに福を与へておやりなさりたいのであるから、その神意を体して、買い物をしてやるのである。こういう所で使う金は決して無駄費いではない、結構に御神徳を頂くのである。